

石神遺跡第7次発掘調査現地説明会資料

昭和62年10月31日

奈良国立文化財研究所 飛鳥蘇原宮跡発掘調査部

はじめに

大腸 潔

昭和56年に開始した石神遺跡の調査も今年で第7次をむかえることになった。今回の調査は第6次調査区北に接する水田（東西60m、南北18m）を対象とし、8月3日に着手した。調査面積は約1000㎡である。

調査の結果、7世紀中葉から8世紀初頭にかけての数時期にわたる遺構を検出した。調査はなお継続中であるが、遺構は重複関係やこれまでの調査の所見等から、A～Dの4時期に分けられる。

調査の概要

A期（7世紀中葉）

A期は2期に細分できる。A-1期の遺構には石組溝aがある。石組溝aは第4次調査で検出した井戸から北にのびる暗渠で、溝底内法幅 0.6～0.8m、深さは地表下1.2mである。A-2期に蓋石をはじめ側石の多くが抜き取られ、側石1段分が残る。

A-2期の遺構には掘立柱の南北廊01と掘立柱建物02・03・04・05、石組溝b・c・d、石敷a・bがある。南北廊01は第3次調査で検出した南面大垣から北にのびる単廊である。今回の調査で大垣から北34～40間目を検出したことになり、その総長は約100mとなる。この南北廊は低い基壇上に建ち、東西に断面逆台形の石組の雨落溝を有しているが、今回は雨落溝の遺存状態は良好でない。なお、南北廊の東側には多量の焼土と炭化した屋根材が堆積しており、柱の抜取穴にも焼土が認められることから焼失したと考えられる。

A-2期の遺構はこの南北廊によって東西の二区画に分けられる。東には掘立柱建物02・03・04が整然と配される。掘立柱建物02・03は、第5次調査区北端で検出した桁行12間の東西棟の両端に接してコの字形に配される梁行2間の南北棟で、今回の調査で両者とも桁行規模が16間以上ある長大な建物であることが判明した。建物02の東側には石組溝cが、建物03の西側には石組溝dがある。掘立柱建物04は、以上の回廊状に配された建物群の中軸線上に位置する建物で、桁行8間、梁行3間で中央に間仕切りのある身舎に四面庇を有する大規模な南北棟に復原できる。石組溝bは石組溝aに代わって設けられた暗渠で溝底は内法幅 0.4～0.5m、地表下1.2mにある。蓋石はこれまでの知見では地表に露出していたものとみられる。石敷aは建物03と南北廊01の東雨落溝の間を一面に覆っていたものと考えられ、暗渠にむかって緩やかに傾斜する。

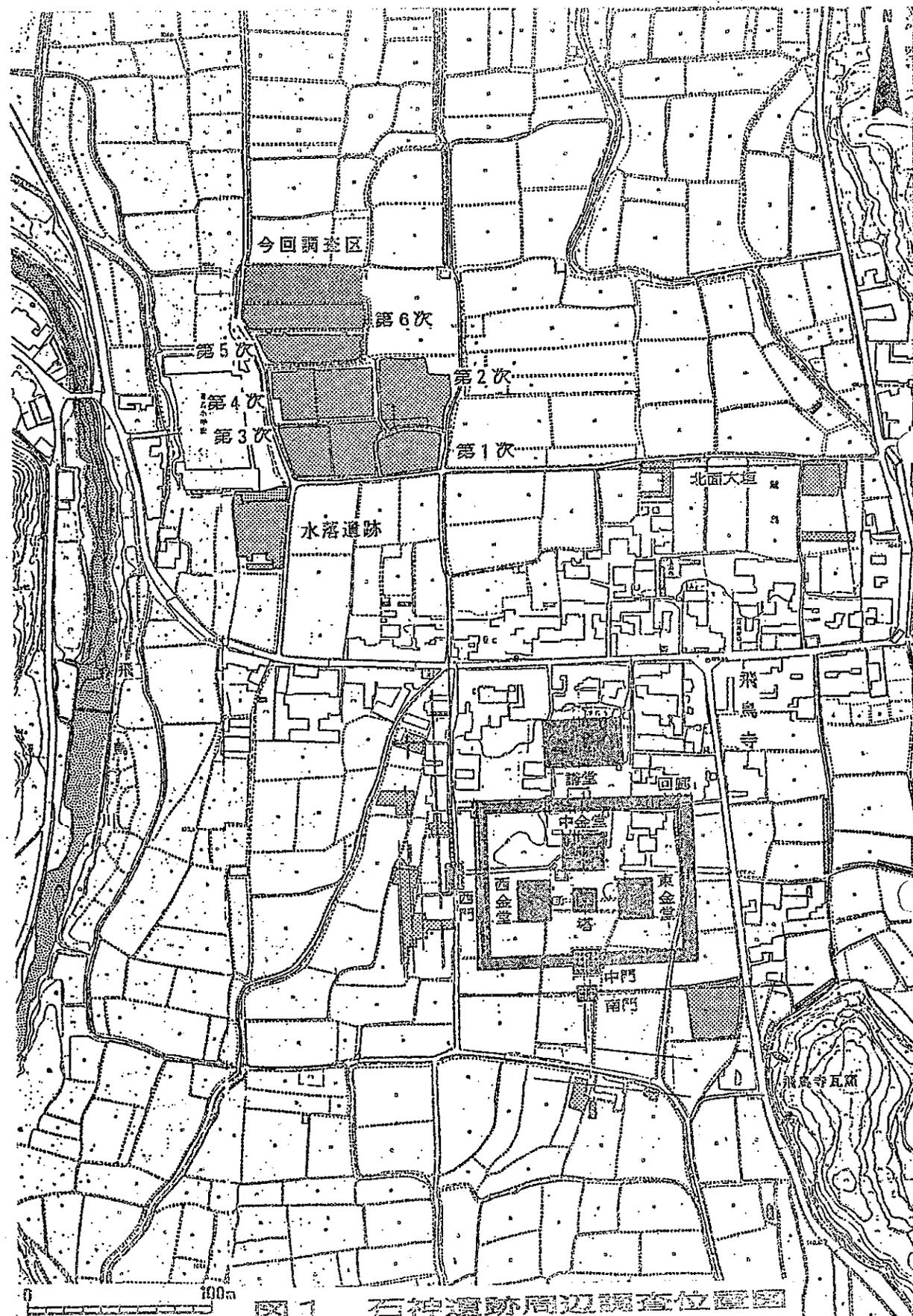


図1 石神遺跡周辺調査位置図

南北廊の西側にある掘立柱建物05は桁行3間以上、梁行3間の身舎の東・南・西に底を有する南北棟で、さらに北へのびる。この建物の柱抜取穴にも焼土が含まれている。建物05の南には石組溝eをともなう石敷bがひろがる。

B期（7世紀後半）

A期の遺構をすべて廃棄してB期の遺構が営まれる。検出した遺構には掘立柱建物07・09、掘立柱塀06・08がある。建物07は第6次調査で南半を検出している桁行8間、梁行2間の南北棟である。建物09は調査区西北隅で検出した建物で、南北棟の南妻とみられる。塀06は第6次調査区から北へのび、今回7間分を検出した。塀08も第6次調査区から北へのびるもので、今回10間分を検出した。

C期（7世紀後半）

C期の遺構には掘立柱建物10と掘立柱塀11がある。塀11は第4次調査区から北へのびるもので、今回8間分を検出した。建物10はこの塀の東側で検出したもので、桁行4間、梁行2間の小規模な建物である。

D期（7世紀末～8世紀初頭）

D期の遺構には素掘り溝a・b、掘立柱塀12・13、掘立柱建物14がある。素掘り溝a・bは第3次調査区から北へのびるもので、路面幅約10mを有する南北道路の両側溝とみられる。溝幅約2.5mである。塀12は素掘り溝bの西約11mをほぼ平行してのびる南北塀で、第4次調査区で西へ折れ曲ることが判明している。今回7間分を検出した。塀13は塀12北端の柱穴から西へのびる東西塀で、13間分を検

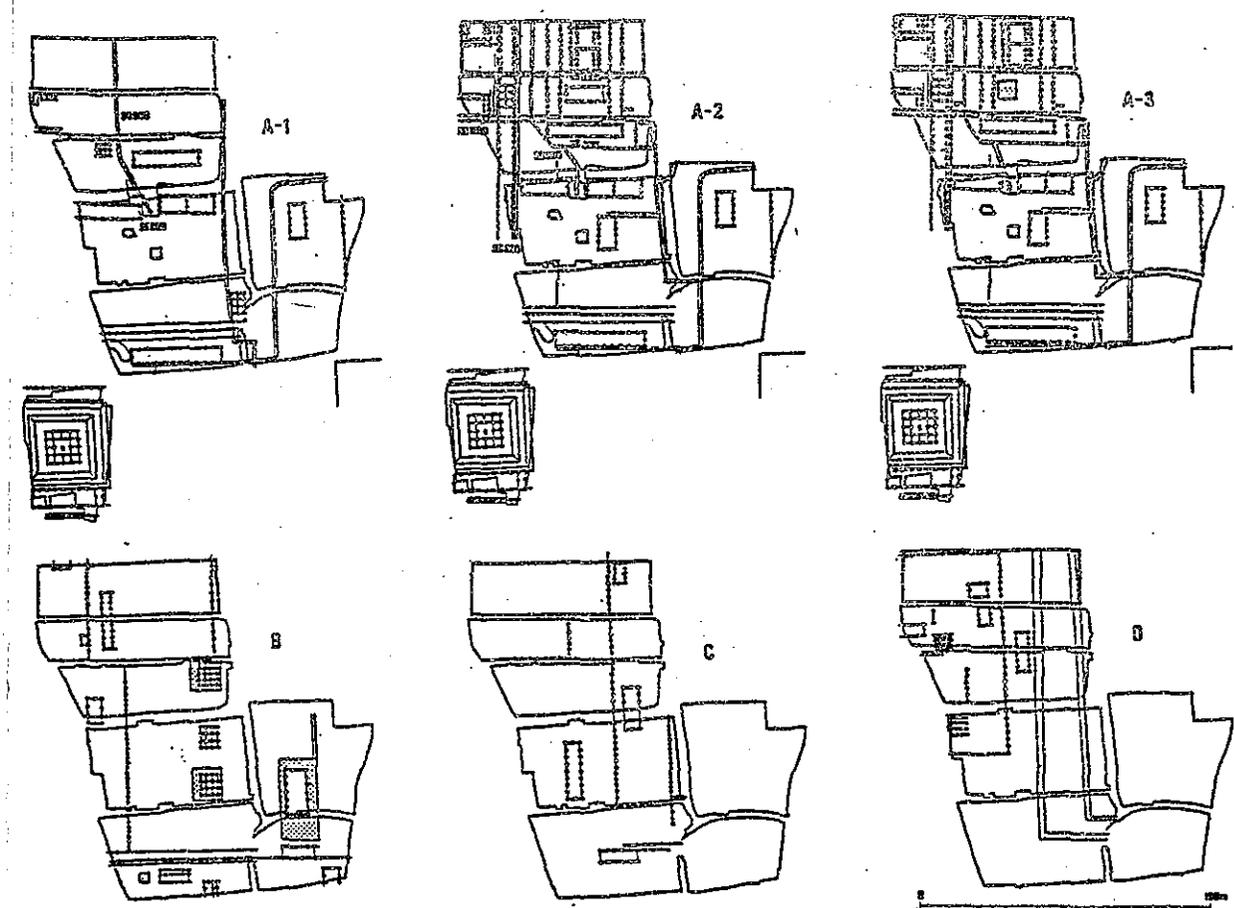


図2 石神遺跡主要遺構変遷図

表1 建物・塀規模一覧

時期	番号	種類	規模/底	桁行 (m)	梁行 (m)	庇 (m)
A-2期	建物01	南北廊	40間以上×1間	2.5	5.0	—
A-2期	建物02	南北棟	16間以上×2間	2.1	2.1	—
A-2期	建物03	南北棟	16間以上×2間	2.1	2.1	—
A-2期	建物04	南北棟	8間×3間 四面庇?	2.0	1.8	1.6
A-2期	建物05	南北棟	3間以上×3間 四面庇?	2.5	1.8	1.8
B期	塀06	南北塀	12間以上	2.6前後	—	—
B期	建物07	南北棟	8間×2間	2.0	2.2	—
B期	塀08	南北塀	17間以上	1.8前後	—	—
B期	建物09	南北棟	×2間	—	2.5	—
C期	建物10	南北棟	4間×2間	1.9	1.6	—
C期	塀11	南北塀	37間以上 (83m)	2.2	—	—
D期	塀12	南北塀	28間以上	2.5	—	—
D期	塀13	東西塀	13間以上	2.4	—	—
D期	建物14	東西棟	3間×2間	1.3	1.7	—

出したが、西から2間目の柱穴を欠く。この塀の検出によって、D期には南北長約70mの区画が存在することが明らかになった。建物14は塀12の西側で検出した建物で、桁行3間、梁行2間の小規模な建物である。

その他の遺構

D期以後の遺構としては多数の土坑と方形土坑a・bがある。土坑には多量の土器が投棄されている。方形土坑はこれらの土坑群より新しい一辺4m前後の浅い土坑で、底に井桁状に残る溝があるが、その性格は不明である。この他に時期や規模の不明な塀や建物をいくつか検出しているが、これらについては今後の調査の進展をまって検討したい。

出土遺物

出土遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。最も多いのは土器類で多量の須恵器・土師器、少量の縄文土器・弥生土器とともに土馬などの土製品がある。瓦類はきわめて出土量がすくない。金属製品では鉄、刀子、鎌、斧、釘、紡錘車などの鉄製品がある。石製品には玉類、砥石、鏃、剥片などがあるが、多くは縄文～古墳時代の遺物である。

おわりに

従来の調査成果と今回の調査結果を総合すると、7世紀中葉（斉明朝）を中心としたA期の利用形態がかなり明らかになり、飛鳥における宮都建設が計画的かつ本格化していたことが判明した。以下、この点を中心にまとめておく。

A-1期は飛鳥寺の北に南面大垣を外郭とする一画が新設され、この中に建物や井戸、石組溝が設けられる。この地が本格的に利用され始めた段階と位置づけられる。

A-2期には大改造がおこなわれる。南面大垣から北にのびる100m以上の規模を有する南北廊が新設されてA-1期の広大な一画が東西の区画に分けられ、両者に整然と建物が配される。これらの建物の性格についてはなお今後の慎重な検討が必要であるが、明治35年に発見された須弥山石や石人像、また第1次調査以来明らかになってきた屈曲する石組溝や石敷広場の存在などから、この地域が「斉明紀」に度々登場する饗宴の場にあたることは首肯できよう。今回検出した建物02・03・04は、第5・6次調査で検出した建物とともにきわめて整然とした配置計画のもとに建てられており、その規模の点からも饗宴の場の中でも中心的な位置を占める重要な性格を持つものと位置づけられる。

なお、西の区画にも大規模な石敷をともなう2棟の四面庇建物が整然と配されていることが判明したが、この一画の建物配置の解明も含めて、石神遺跡の今後の調査の進展が期待される。

MEMO

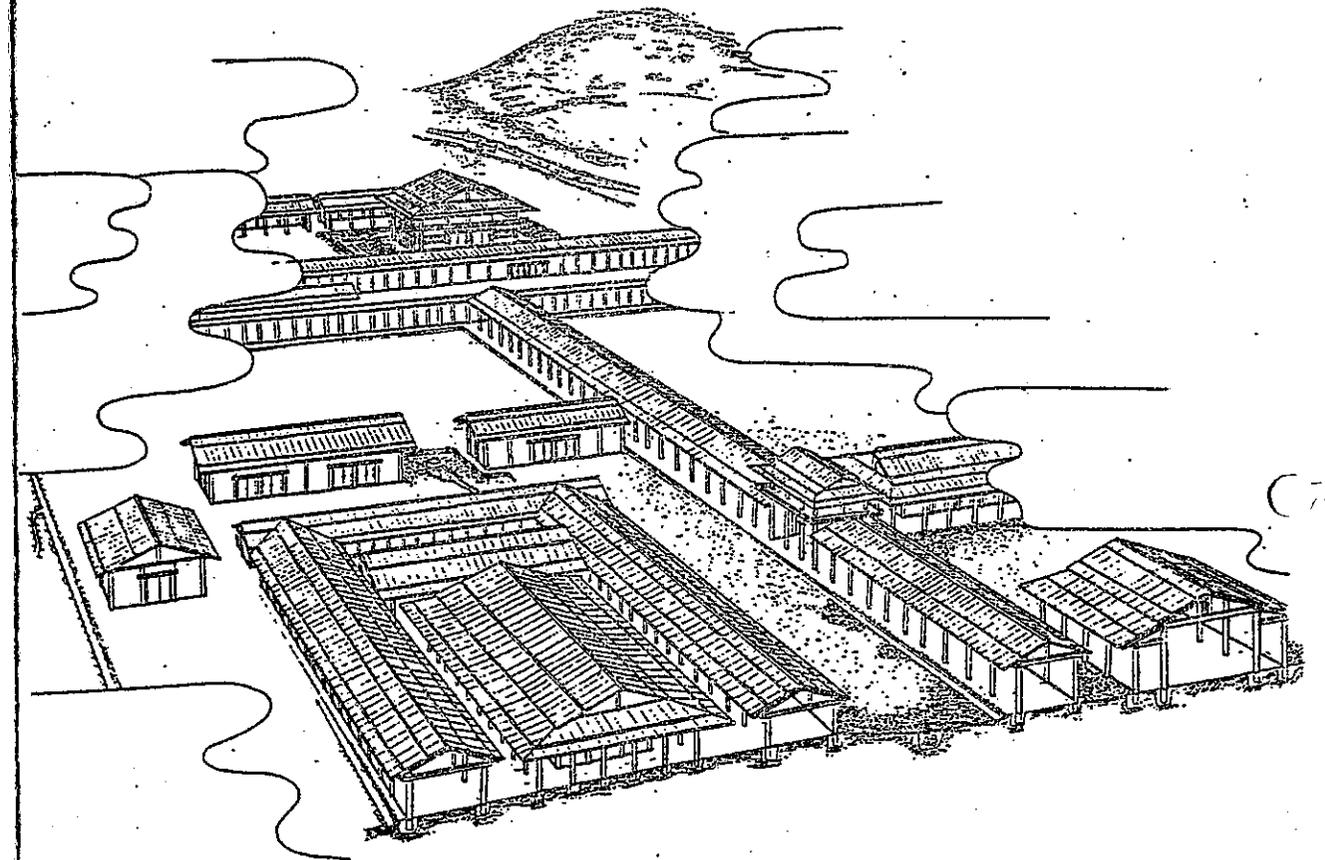


図3 A-2期建物復原想像図

石神遺跡第7次発掘調査遺構略図

